

村人たち 3 年間の記録

目次

マイクロ・ウォーターシェッド（小規模流域）って何？

プロジェクトを実施した場所

プロジェクトの流れ 2007 年から 2010 年

プロジェクトの歩み

STEP 0 村を一緒に歩く “オラたちの村で何が起こって来たのか？”

STEP 1 植物資源調査 “オラたちの村には何がある？”

STEP 2 水と土の状況 “なぜこの森から植物がなくなってきたの？”

STEP 3 活動計画 “オラ達の資源、水・土・植物をどうして守る？”

STEP 4 実施 “オラ達が計画し、実施して、享受して、運営する”

STEP 5 理想の森づくり “オラ達の森、今どのように利用していて、これからどうやって守っていくのか？”

STEP 6 維持管理

村人たちの声

制作

特定非営利活動法人ソムニード(SOMNEED; *Society for Mutual Aid, Networking, Environment, Education and Development*)

村の人たちの不断の努力を評して

はじめに

特定非営利活動法人ソムニード (SOMNEED ; Society for Mutual Aid, Networking, Environment, Education & Development) は、ソムニード・インディア(SOMNEED India ; Society for Minimum Need India Trust) と共に、インド農村および都市スラムで活動してきました。特に農村部においては、外部に依存せず、コミュニティ（村全体）による自然資源の維持管理を通じたコミュニティの発展と環境保護を目指しています。

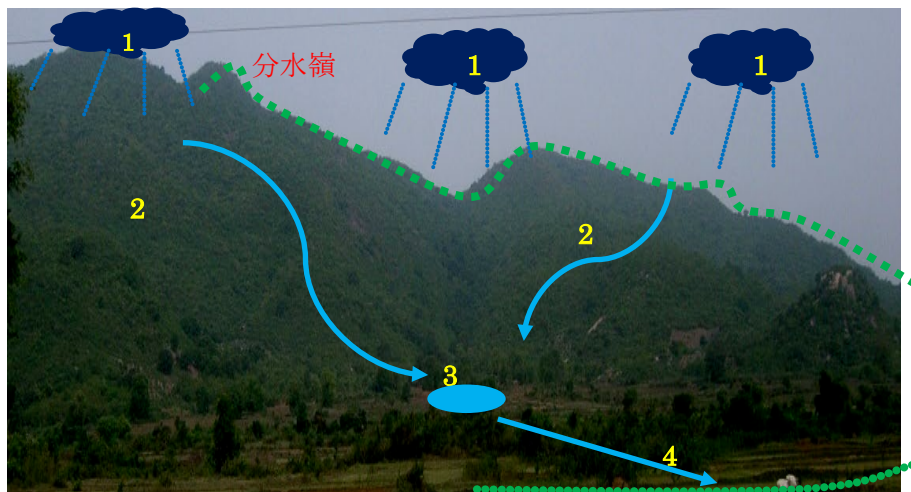
その具現化の一つとして、2007年8月から2010年7月まで、JICA（国際協力機構）草の根技術協力事業として、アーンドラ・プラデシュ州スリカクラム県の3つの流域で「住民主体による小規模流域管理と森林再生を通じた共有資源の管理とコミュニティ開発」を実施しました。

この冊子は、水、森、土の維持管理へ向けた村のオジサン・オバチャンたちの七転八倒の記録です。

ソムニード

2010年9月

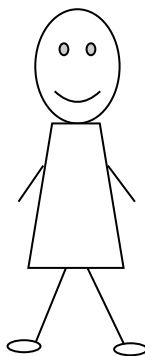
1. マイクロ・ウォーターシェッドって何？



雨が降ると(1)、その雨水は山頂（分水嶺）から流れていきます。そして流れる水は山の斜面で集められ（集水域）(2)、小川となり、池や湖(3)、さらに大河となって流れ出していきます(4)。この分水嶺から流れ出していくまでのエリアを、ウォーターシェッド（流域）と言い、一番狭い流域を、マイクロ・ウォーターシェッド（小規模流域）と言います。

例えば、雨の降っている時に外に立つと、雨は頭に当たりますね。それから顔や頭の後ろ、耳側と色んな方向に雨水は流れていきますが、顔に流れてくる水は目の窪みや鼻筋を通り、時には口の中にも入ったりしながら、胸やお腹を伝って、足から地面へと水は落ちていきます。

このように、雨水を身体の前側で受けて、所々溜まりながら流れ落ちていく部分が「流域」です。また、顔の部分が、「山頂」胸やお腹を「中腹」、太もものあたりを「裾野」、膝から下は「田んぼや畑」として、村の人たちは「流域」を覚えています。



2. スリカラム県の3つの流域

(1) マーミディジョーラ小規模流域（5 集落）



集落名	世帯数
マーミディジョーラ	49
リンガプラム	4
プーラコンダ	4
ゴディヤパドゥ	28
タラパドゥ	18
合計	103

(2) ポガダヴァリ小規模流域



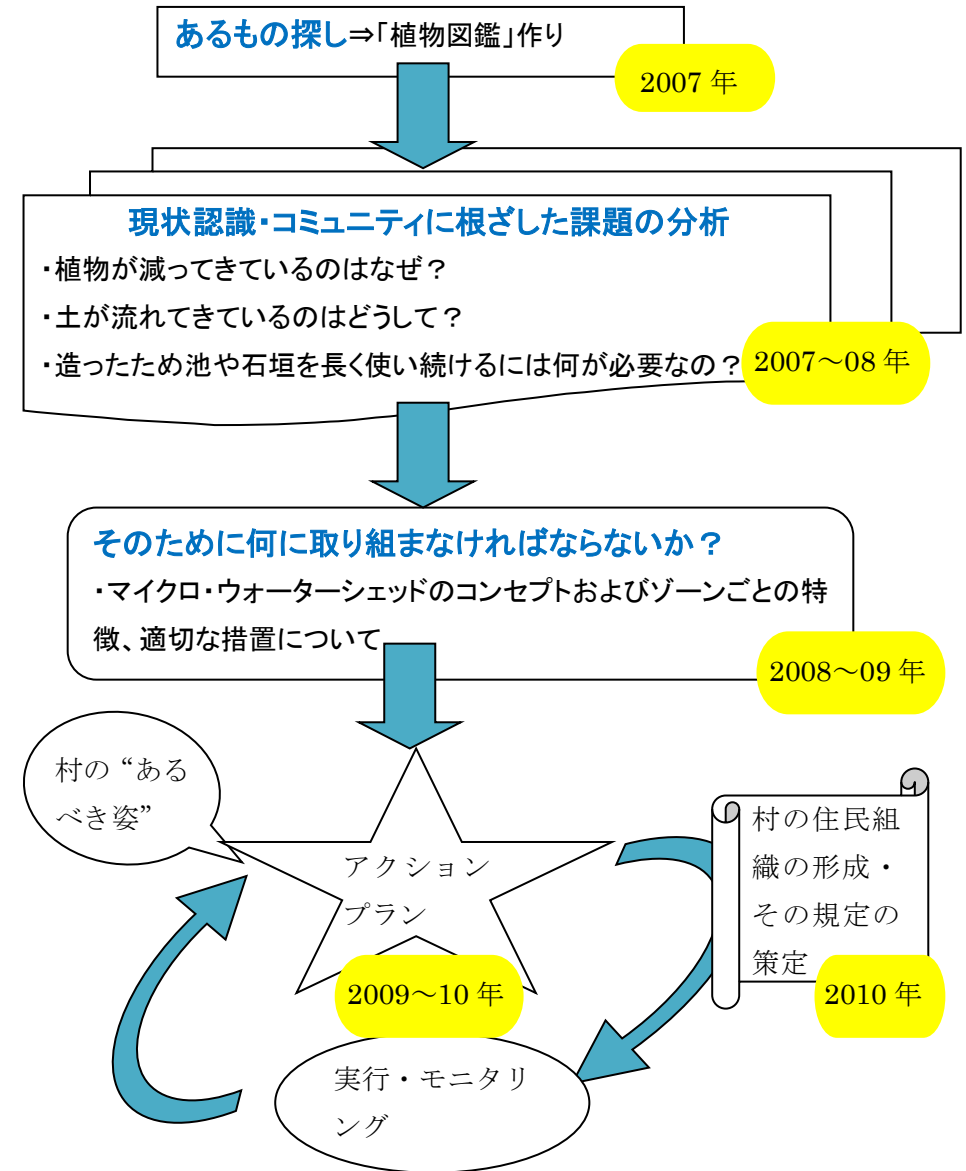
集落名	世帯数
ポガダヴァリ	49

(3) ゴットウパリ小規模流域



集落名	世帯数
ブータラグダ	27

プロジェクト概要



3. 村の人たちが“主体的に”活動を始めるまで

Step 0; 村と一緒に歩く “オラたちの村で何が起って来たのか？”



ソムニード、ソムニード・インディアのスタッフ、そして村の人たちは、山頂から田畑まで一緒に歩きながら、植物や水、山の斜面の今の状況と、それらをどのように使っているのか、観察しました。

「あなたが子どもの頃は、この場所には何の植物が生えていましたか？」
「この木の根っこが見えているのは、どういう事を意味しますか？」

村の人たちは、山歩きをしながら尋ねられる数々の質問を通して、『自分たちの村・山に何があって、何が起きているのか』、薄々と考えていくようになりました。そして、ソムニードは村の人たちに尋ねました。

「ソムニードは直接、お前さんたちにモノをあげるようなことはせん。だけど、孫子の代まで豊かな水や森を残していくために、何が必要なのか、自分たちで考えて実行できるようにするトレーニングはしてやれる。一緒に3年間、やっていくか？」

『今までのヨソ者たちとナニか違うぞ』と思ったオジサン、オバちゃんたち。

「一緒にやりましょう」と、答えた村の人たちは、こうして3年間のスタートを切ったのだ。

Step 1; 植物資源調査 “オラたちの村には何がある？”

まず最初に取り掛かったのが、村の宝物さがし。ソムニードは、「村には結構いろんな植物があるものだ」と感じたため、オジサン・オバちゃんたちに植物について教えてもらうことにしました。いつも「お前たちの村にはコレがない、アレが足りない」と言われ続けてきたオジサン、オバちゃんたちでしたが、ソムニードに「この木はね・・・」「この草はね・・・」と説明していく内に、「オラ達の村には、役立つ植物がたくさんある」と気付きました。



そして、そうした植物の記録づくりを始めたのです。その調査用紙も自分たちで考えました。調査の中では、州の公用語であるテルグ語だけでなく、自分たちが日頃使っている山岳少数民族の言語「サワラ語」での植物名も記録していきました。また、木や灌木・草や蔓などの種類分けも行い、季節ごとの特徴、その植物の利用方法なども、村のお年寄りに聞いたりして調べていきました。

調査を最初に始めたのは、ポガダヴァリ村。

他の村にも広めていこうと、ポガダヴァリ村では自分たちで指導員を選び、調査の方法や記録取りについて、他の村でも研修を行いました。



そして、この調査を通じて、村の人は気づいたのです。

「たくさんの植物が無くなりかけている！そしてもっと多くの植物がすでに村から消えてしまっていた！」

Step 2; 水と土の状況 “なぜこの森から植物がなくなってきたの?”

植物調査をしながら、村の人はその植物の周辺の状況についても調べていきました。植物によって生える場所が赤土だったり黒土だったり、薬草は水辺に集中している等、普段は意識しないことにも目を向けるようになりました。そして気づいたのです。「山の上から土が流れ落ちて来ている」。

そして、村の人は土壌流出を防ぐ方法、水を溜める方法について、見直すことにしました。



よその村に行き、壊れずに使い続けるにはどのような活動が必要なのか、使い物にならなくなっていれば、どうしてそのような状況になってしまったのか、自分たちの目で見て、話を聞いて、考えました。
「今も自分たちでメンテナンスをしている村は、建設費用がどれだけかかったか、知っているわ」

「委員会を作って議事録や会計も付けていた」

「でも、委員会を作っていても誰も何もせずに、使えなくなったため池もあったね」

他の村の事情を知って驚く村の人たち。そして自分たちの村の、ため池や砂防ダム、石垣なども見つめなおすことにしました。



砂防ダムも、定期的に溜まった泥を取り除かないから、壁を高くすることしか考えていない。

ため池に流れ込む水路も、崩れかかっている何もしていない。

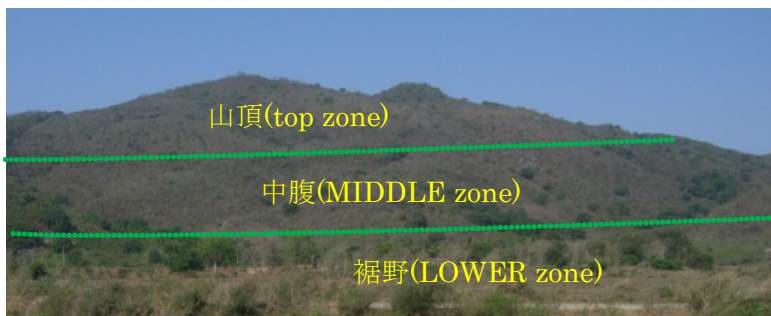
「自分たちの山の土を良くして、水をうまく溜めるにはどうすればいいんだろう？」

STEP 3; 活動計画 “オラ達の資源、水・土・植物をどうして守る?”

具体的にナニをしていけばいいのか、3つのゾーンに分けて取り組むことになりました。

「山頂は水源地でもあるため、木に覆われているのが良い」

「保水と一言で言っても、いろんな方法がある」



専門家から、基本的な考え方を学んだ村の人たちは、再び山から田んぼまでを歩き、改めて自分たちの村を山がどのように囲んでいるか、小川はどこにあるのか、確認しました。



各村で集会を開き、活動を考える村人たち。
「ソムニードが何かをしてくれるんじゃない。自分たちで考えて、計画して、実行していかなければならないんだ」

だけど、村の人たちがいつも言うのは、「たくさん水があれば良い」

「この池を大きくすると、たくさんの田んぼが灌漑できる」

そこで、ソムニードはオジサンたちに聞きます。

「たくさんって、どれくらい？」

水を溜める、土壌流出を防ぐ、植林をする、等々の作業を計画するのに、一番必要な基本的なコト、面積や体積の計算。これも、村の人たちは学びました。

この頃から、村の人たちは研修に来るメンバーを、オジサン中心から、若者中心に変えてきたのです。



1 エーカーの田んぼを灌漑するのに必要な水の量の計算方法を説明し、村の人たちが考えているため池の体積を計算してみる。
「アレ、全然足りないや」

こうして、一つ一つ村の人たちはサイズを測り、そして必要なコストの計算もしました。

何度も何度も練習をする合間に、村の人たちはいろんな専門家から研修を受けました。

植林、土壌や水の保全、測量、などの考え方や方法についてです。



「距離を測るときは、50メートルとか100メートルごとに印をつける」
「荒れ地には、カスタード・アップルが一番強い」
「急な大雨の時の土砂や水流に耐えられるように、石垣の壁や幅のサイズはこうすれば良い」



村の人たちは、研修センターで、村で、

山で、研修に次ぐ研修を受けてきたのです。

ただ単に、あったらイイな、これくらいあればいいかな、というようなアイデアには、



「一匹の鶏を 100 人で食べるようなものだ」
と、いつもソムニードから言われた村のオジサンたち。

こうした体積・面積の計算練習や縮図描きを経て、村の人たちは 1 年間（2009 年度）に何をするのか、活動計画としてまとめました。

何の作業を、どこで、いつ始めていつ終わらせるのか、それには何人の村人が参加して、必要な資材は何か、誰がコーディネートしたり記録を付けたりするのか、この作業をすることで何が期待できるのか、出来上がりの大きさ、それを完成させるまでに必要なコストはいくらか、それらを全て記したのが、活動計画です。

「将来の補修や管理に必要なコストをどうするか？」

村のオジサン・オバチャンたちは、造りっぱなしではなく将来のメンテナンスについても、考え始めました。

活動計画(Action Plan)

活動	場所	期間	方法	資機材	役割分担	期待する効果	の 出来上りの サイズ/単価	小計
----	----	----	----	-----	------	--------	----------------------	----

砂防ダムやため池の底にたまった堆積土の除去や新たなため池の造成、トレンチ（溝）掘り、ため池の堤防強化や越流堤の設置、石垣、堰堤の建設などの構造物の建設、植林活動……

「オラの田んぼにさえ水が来ればオッケー」と考えていたオジサンも、「オラ達の山に木があって、水が十分に溜まるようにしなければ」と考えるようになりました。

活動計画が完成したとき、事業開始から 20 カ月経っていました。

STEP 4; 実施

“オラ達が計画し、実施して、享受して、運営する”

資機材の調達も、自分たちでできる限りは行いました。

セメント作りに必要な砂利も、隣の州にいる同じ部族の村まで行って、岩の砕き方を習いました。

左官も、最高の仕事をしてくれる人を自分たちで見つけて、村まで連れてきました。

「オラ達で作ったオラ達のための活動計画。オラ達が実行するんだ」と、意気込む村の人たち。

途中で「とりあえず掘っちゃえ」とならないよう、活動計画と照らし合わせながら作業しました。



「どこに何の設備がどんな大きさに要するのか、いつからいつまで何の作業をしないといけないのか、それにはどれくらいの労働力や資材がいるのか、誰がするのか、こうやってこれからも計画を立てていかないと、森を育てて水を溜めて使っていくっていうのは、難しいねえ。しかも、5年、10年と続けていかないと」あるオジサンがつぶやきました。

自分たちで課題を見つけ、計画を立てて実行する——それは、村の人たちのソムニード、双方が信頼しているからこそできるのです。

作業中は、担当の村の人たちが作業記録やモニタリング、出納簿も、付けました。



STEP 5; 理想の森づくり
“オラ達の森、今どのように利用していて、これからどうやって守っていくのか？”

「市場に買い物に行った時、適当に豆を 5 キロ、ターメリックの粉を 1 キロと買いますか？」

ソムニードの問いかけに、村

の人たちは即座に答える。

「いやいや、買い物に行く前に、家に何があって何が足りないのか、まずチェックするよ」

「では、植林をする時に必要な作業は何でしょう？」

そして、村の人たちは自分たちが生活でどのように森を利用しているのか、シーズン毎にまとめていきました。食糧、薪、家畜のえさ、木材、薬、の 5 つの利用目的毎に色分けしたスティックを使い、発泡スチロールで作った山の模型に表しました。

「家畜のえさは、中腹から採ってきてるわね」

「薪用に使う灌木、山頂近くまで行かないと取れないよね」

同時に、山頂、中腹、裾野と、3つのエリアで、何が豊富で不足しているのか、あるいはすでに無くなってしまったのか、それも一目でわかるようにしました。

「村から無くなった植物は、山頂と裾野に集中してるなあ」

「アタシはいつもいつも、山の上まで登って、重たい薪を運んでくるのがしんどいのよ！」と模型の山を指さしながら訴えるオバチャン。

「もし何もしないまま、こうして使い続けていくと、私たちの山はどうなってしまう

うんだろう」

「では、どのような山であつたら良いのですか？」

ソムニードからの問いに、再び模型の山を使って「理想の森」を表した村の人たち。

「薪になる木は、中腹付近が良いよね」

「家畜のえさになる植物は、裾野にたくさん要るな」

と、山頂から裾野まで、食糧・薪・家畜のえさ・木材・薬に使う植物が、どのように分布していれば理想的なのか、村の人たちは考えた。

生活にも利用でき、保水や土壌を保全し、そして野生の動物にとっても食糧が得られる森になるのか――

STEP 6: 維持管理

“私たちが、水と土と植物を管理していかなければ！”



そして人々は、今までに実施した作業や植林を維持管理していくため、これからの3年間に必要な活動を考えました。

これまでにしてきた活動、これから必要な活動を、流域のミニチュアとして作り上げました。ミニチュアには、集落や川、メインロード、田畑の位置も描き、自分たちの村をどのように山が囲み、水が流れ、そし

てどこに何を作って来たのか、一目でわかるようになりました。

一人ひとりで感覚的に分かっていた“オラの村”が、自分たちが暮らす“オラ達の村”という、村人みんなによる共通の理解になったのです。

“自然資源を維持管理していくためにも、僕たちには組織が必要だ”

村の人たちは、作業労賃から一部定額を貯蓄してきていましたが、資金運用を含め、今後の維持管理や村の活動を続けていくためにも、村の組織が



必要だと気付きました。そして、各村で組織を作り、規定を策定し、代表執行委員会の選出も総会で行いました。代表執行委員たちは、これからの村の活動の計画策定、実施、そして

維持管理の責任を担っていきます。

“子や孫のためにも、私たちは理想の森をつくらなければ”



人々は理想の森を実現
させていくために、植林を
始めました。
自分たちの山から種を採
取し、枝や株も集めまし
た。
自分たちの山にすでにな
い種類は、近隣の村から
調達しました。
山岳少数民族の言葉でし



かわからない植物もあります。

今までは、収入になりそうなメジャーな果樹の植林が多かった村の人たち。
今回、初めて自分たちの生活に密着した植林を行いました。

“ 事業は終わる、だけどオラ達の活動は終わらない”



植林時には、植えた苗木の定期的
モニタリングを実施していくために、
植林地の一部にモニタリング・プロ
ットを設けました。
同様に、保水や土壌保全のために
設置した様々な構造物の効果を測
っていくためにも、村の全ての井戸
の水位を毎月 1 日に記録していくこ
とにしました。



村の人たちは言いました。
「今までは、どのように水を溜め、土
が流出するのを防ぐか、ということ
を学んで実践してきました。これからは、
そうして守る水や土を、どうやって使
っていくか、ということです。そしてそ
うした研修を、ソムニードから受けた
い

のです。」

オジサン・オバチャンたちの努力は、まだまだ続きます。

“ワシは、研修には最初から参加しておったが、何をしているのかよくわからなかった。ただ、研修センターのメンがうまいから行っていた。だけど、今なら分かる。ワシたちが何をしようとしているのか”

B. チュッカイヤ, タラパドゥ集落(男性、60 代)

“今、日雇労働で道路工事に出ているけれど、何立方メートル盛るのか、立方メートル当たりいくらなのか、責任者に聞くことができる。こんな質問ができるようになったのも、ソムニードの研修を受けてからだ”

S. モハーン & S. ドウルガラオ, ブータラグダ集落(男性、20 代)

“僕たちは、土壌流出を防ぐために石垣を築きました。石垣を築くと、土壌がそこで蓄積できることを知りました。以前はホウキ草の栽培も一度植えると 2 年間しか収穫できなかったけれど、今は、この石垣の技術をホウキ草栽培にも応用することができます。なので、村の特産のホウキ草も 1 回の植え込みで 4 年以上は収穫できると見込んでいます”

B. ガンガイヤ, ゴディヤパドゥ集落(男性、20 代)

“事業が始まった当初は、薬草についての事業だと思っていた。だから、ワシらはチュッカイヤを研修に出させた。だけど 1 年半も経つと、これは薬草のプロジェクトじゃない、ワシらの山や村についての事業だと分かった。だから、研修や作業には、若いものやカアチャンたちも参加させることにしたんだ。”

U. クリシュナ, タラパドゥ集落(男性、50 代)

“ソムニードは、この事業の中で、山頂や中腹に中心的に植林するように、そして僕達の山にある植物を重点的に植林するよう、激励してくれた。こんな植林は、今までに一度もしたことがない。僕はとても嬉しい”

B. ガンガイヤ, ゴディヤパドゥ集落(男性、20 代)

“以前にも、ワシらは他の事業で委員会が作られてきた。だけど、組織の規定を作ったことは一度もない。今、ワシらは自分たちの組織を作り、ワシらの言葉サワラ語で規定を作成した。こんなに嬉しいことはないし、規定があるからこそ、組織の活動は続けていく”

U. クリシュナ, タラパドゥ集落 (男性、50 代)

“この事業が始まる前は、出稼ぎに出てしまう人がたくさんいました。日雇い労働でもらう労賃が多少の足しにはなっていましたが、私たちは農民です。農業で生計を立てています。だから、今までは雨期ごとに雨水と一緒に肥沃な土壌が流れ出し続け、不作になれば出稼ぎに行かざるをえませんでした。だけど、この事業で行った作業の全ては、私たちの田畑にも水と肥沃な土壌をもたらし、結果的に豊作になることを願っています。きちんと収穫できれば、出稼ぎにいく必要はないのです。そうなるために、私たちが 主体となって作業を行ってきました。私たちは何をしたのか、何故それをしてきたのか、今は誇りを持って伝えられます。

J. パドマ, ポガダヴァリ村(女性、30 代)